安楽寺だより

第62号

第21回 お釈迦さまのお弟子②
ー大迦葉と阿難ー

紙面内容

２面　観経にある浄土の観法（後編）
３面　春彼岸墓法要を勤める
４面　暮らしの中の仏教語（自然）

編集・発行　安楽寺住職　吉田　和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話　〇五二（八四一）二六〇六

真実を求めて出家した大迦葉

お釈迦さまがブッダガヤ郊外の菩提樹の下で、成道（悟りを得る）されて以降四十五年に亘り布教されました。そして多くのお弟子が輩出されました。

寺だより第五〇号に掲載しました、舎利弗（シャーリプトラ）と目連（モッガラーナ）を始め富楼那（プールナ）阿那律（アニルッダ）など十大弟子と言われるお弟子がおられます。

その中のおひとり摩訶迦葉《大迦葉》（マハーカーシャパ）はマガダ国のバラモン出身ですが、自ら出家して道を求めてお釈迦さまのお弟子となりました。真実を求める心に支えられて修行に励みました。

大迦葉の衣食住については、小欲知欲に徹した修行で遊行、乞食托鉢を基本としていました。お釈迦さまの教団生活が竹林精舎や祇園精舎などの僧院に定住することになった後も林野に住み、出家者本来の「頭陀行」を守り続けていました。

大迦葉(左)と阿難

お釈迦さまに仕えた阿難

もうひとり阿難（アーナンダ）は釈迦族の出身で、お釈迦さまの従弟（いとこ）にあたります。舎利弗と目連の強い勧めでお釈迦さまの侍者になられました。阿難は自戒を保って実に真面目に熱心に仕事をしていたと言われています。

お釈迦さまが養母（母の妹）マハープラジャパティの出家の願いをなかなか認めなかった時、阿難はお釈迦さまを説得し、女人の出家を認めることとなりました。彼の人望は相当に篤かったようです。

阿難はお釈迦さまの教えを最も多く聞いた人です。インドでは知識の伝承は当時、口伝を重視していました。

阿難はお釈迦さまが八十歳で入滅されるまでの二十五年間、身の回りのお世話をし、教説を記憶していました。

大迦葉と阿難は、お釈迦さまが亡くなられた後で、教団の中で重要な役割を果たされました。後日お伝えします。

大迦葉は、「頭陀第一」阿難は「多聞第一」と言われています。

お釈迦さまの説かれた十三通りの観法『後篇』

お釈迦さまは、阿難とイダイケに告げました。

『蓮華台の光によって、わが身の闇の深さ照らし出されるのを観ることできたならば、阿弥陀仏のおすがたを想いうかべなさい』

『あらゆる仏は、生きとし生けるものを救う身となられて、仏を想うすべての人びとのうちに現われ、迷いの暗を払いたもうからである』

『やがてこころの眼も開けて、七宝で飾られた極楽国のありさまを観ることができるであろう』（第八観・像観）

『この観想ができるようになったならば、無量寿仏の真実なる光明のおすがたを想いみるべきである』

『この観想を、あまねくすべてのみほとけの尊きおすがたの観想とし、これを第九の観法と名づけるのである』（真身観）

お釈迦さまが後に説かれた四つの観法も、真身観を他の方面から明らかにするものであるといえます。

煩悩に苦しむ有限無常の人間のこころに現われてくださる仏こそは、その想うこころを超えた無限平等の仏であり、想えば想うほど、その徳が仰がれてきます。

仏のはたらきは、私が想うに先立って私を照らし護っていてくださるのです。その光のなかに生かされておりながら、悩み続ける我が身の愚かさが思い返されます。

生かされて生きる世界にこころが開く時、私のおかれている境遇は変わらなくても、そのままで、その境遇のうちに尊さを見いだすことができるのです。

観世音菩薩の真実なる御身のすがたを知る観想（第十観）大勢至菩薩の御身のすがたを想いみる観想（第十一観）について、説かれた後お釈迦さまは、続いて阿難とイダイケに告げられました。

『この観法を成就するならば、無量寿仏の極楽世界を観ると名づけてよいであろう。この観想を普く浄土を観る観法と呼び（第十二観）やがて無量寿仏が無数の化身を現わして、観世音・大勢至の二菩薩とともに、つねに行者のところへ至りたもうに違いない』

『さまざまな化仏のすがたを想いみることにより、阿弥陀如来のおこころのうちに、摂めとられていくのである。このような観想を「雑想観」とよぶのである』（第十三の観法）

私たちの一生涯は、本当に不安な毎日を生きています。人生の根深い矛盾の悩みから開放してくれる境界は、ただ如来の本願に目覚めるところにのみ開かれるのでありましょう。一生涯のすべての経験が、仏を拝み、仏法を聞くための大切な素材として受けていける心境が開けてくることなのです。

（おわり）

定例法話を勤める

三月十三日、定例法話をお勤め致しました。春が来たような暖かい日和で、十四名の門信徒の皆様にお参りいただきました。ご法話は、愛西市の野呂美道師（安泉寺前住職）にご出講いただきました。

「全国各地には、地域の皆様に愛されて営まれるお地蔵さまがたくさんございます。東京下町の葛飾にある「縛られ地蔵」は、諸願成就の守り神としてお地蔵さまに願かけ縄を巻いて供養することで知られています。」

野呂師は紙芝居を用意され、日本昔ばなしに出てくる有名な笠地蔵のお話をされました。

『昔むかしある田舎に貧乏なじいさまとばあさまが住んでいました。年の暮れには正月飾りの餅がありません。そこでじいさまは、二人で作った笠を売りに町へ出かけますが、ひとつも売れません。仕方なく帰り道で雪をかぶった六地蔵を見つけ、寒かろうと思い、笠をかぶせて家に戻りました。その夜、外で物音がするので、出てみると、米俵やお餅・野菜などが置かれていました。来られたのは六地蔵さまで、二人は無事お正月を迎えることができました。』というお話しです。人を思いやる気持ちは必ず自分に返ってくる。このお話しはお慈悲のこころと無欲の善行の大切さを表わしています。

日本昔ばなし「笠地蔵」

インドには六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）輪廻の教えがあり、人間は行ないによって次に行く世界が決まると言われています。六地蔵は、この六道を表わしているという説、もうひとつの説、私は笠地蔵のお話しは、単なる昔ばなしではなく、『笠をかぶせる』とは、六字名号・南無阿弥陀仏をお称えすると、やがてお地蔵さまがお迎えに来られるとの説を信じます。

お釈迦さまは、お悟りののち、六道の世界を超え、真理の世界に生きる教えを　ご生涯をかけ説き、生きられた方だと思います。」

春彼岸お墓まいり

三月十九日、八事霊園安楽寺墓地で、春のお彼岸墓法要をお勤めしました。早朝は小雨が降りましたが、八時過ぎには春らしい暖かな陽気になりました。多くの皆様におまいりいただきました。お花・蝋燭・線香をお供えして、ご先祖の方々に静かに手を合わせておられました。

午前十時半、永代供養墓の前には六十名を超える皆様がお集まりされました。お勤めをいたす中で、お一人おひとり亡き方々に想いを馳せながら、お焼香していただきました。

法要の様子は、会館にお参りいただいた三十名の皆様にもスクリーンを通してお伝えしました。

ご参詣をいただきありがとうございました。

仏教豆知識

第六十二回

暮らしの中の仏教語

日頃は何気なく使っている言葉も語源や由来は、意外にわからないものです。

4、「自然」

春の訪れは、いろいろな花の咲く姿の移り変わりが知らせてくれます。梅やこぶしの花、桜そしてハナミズキの花など見る人の心にときめきを与えてくれます。私たちは自然のなかに生き、自然を呼吸して生き、自然は私たちと共にあります。人間は天地自然の恵みに感謝し、脅威を畏れ、自然を我が事として受けてとめてまいりました。

ところが現代では、自然は人間とは別のものとし、人間が勝手に利用できるものに位置づけられてしまっています。その結果、自然破壊が深刻化し、大気汚染や地球温暖化などを引き起こしています。

日本では明治時代になり、西洋思想が流入してくると、英語の Nature が自然と翻訳されてしまったのです。西洋では Nature は人間と対立するものと考えられていますので、日本ではかつての意味は失われつつあります。

この「自然」という言葉は、中国古代の老子の考えである「無為自然」にさかのぼり、それがインドから来た仏教語を「法の爾(しか)らしむるままに」は法爾(ほうに)「自ら然(しか)らしむるままに」という意味で自然(じねん) と理解されたのです。そこには、Nature という意味は全くありません。

親鸞聖人は「自然というは、自はおのずからいう、然というは、しからしむということば・・・行者のはからいにあらず、如来の誓いにてあるがゆえに・・・」(和讃項) と申されています。阿弥陀さまの願いのままに、自ら然らしめられて歩み生きることが願われているのです。

沖縄県西表島の自然

『仏の教えが行き亘っている処には、国々は豊かに栄え、人々は安らかに生き、軍隊も軍備も必要とすることがない』無量寿経にある一文です。▼一人ひとりが自由に発言し、語り合い行動し、社会生活を営むことが、心身ともに豊かに暮らすうえで大切なことです。しかし、世界各地で続く戦争を見聞していると、心安らかには暮らせません。▼「核抑止は必要です」、「軍事力を増やさなければ、日本は守れません」「社会の安定、公の秩序が大事です」と高市首相は、発言されています。▼思想・良心の自由、信教の自由、集会・結社の自由、言論・出版の自由など個人の自由の権利は日本国憲法にはっきり顕わされています。▼日本政府が推し進めている憲法改正論議をきっかけに、個人の自由がないがしろにされる事態は、決して見過ごしてはなりません。